
不条理な世界を虚ろうモノ

かざむき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不条理な世界を虚ろうモノ

【Nコード】

N7220K

【作者名】

かざむき

【あらすじ】

芹沢美奈は正義感が強かった。学校でいじめられている深見薫を正義感のままに助けるが、彼と関わっていくうち、不可解な連続殺人事件に巻き込まれることとなり……。

プロローグ

夕日に照らされて、教室は茜色に染まっていた。

その教室、窓際にある一番後ろの席に座っているのは、一人の少年だ。セツトしていない黒髪はさらさらで、それに黒縁めがねの組み合わせが印象的に映る。少年は意気消沈しているのか、席に座ったまま微動だにしなかった。

少年の名前は――深見薫という。

まるで誰もいなくなつた風景と同化するかのようには、薫の顔には表情がない。静寂に包まれた教室の中で、まるで自らの気配を殺しているかのようだ。

その時、ふいに教室に静寂を破つて、もう一人の少年が入ってくる。

「なんだ、まだいたんだ」

教室に入ってきた少年の口調は、とても軽かった。

彼の名前は、宮川真二。薫と同じクラスに在籍している生徒である。短くカットされた髪はアシンメトリーで、爽やかな印象がある。彼の気取らない雰囲気は、所属しているサッカー部でも、このクラスでも一種の清涼剤として機能していた。

「あ、いや、別にさっきの言葉は嫌味で言つたわけじゃないぜ？」

……その、ついな。別に悪い意味で使いたかつたわけじゃなくて……」

「分かつてる」

薫は机に視線を落としたまま、一言を残した。まともに人を見ようとしない、女々しい態度。そんな薫は、平均的な男子高校生よりも体格が小柄で、よくクラスメイトにも舐められる。

冷たく突き返された言葉にも、真二はめげなかった。

「……一緒に帰らないか？」

「どうして」

「どうしてって言われても……今日は、一人だから」

何ともなさげに言つてのける真二は、教室の端にいる薫のもとへと向かつていく。生徒たちの喧騒がなくなった学校に、足音がかつかつと虚ろに響いた。

「薫、いつもは真つ先に帰るのに、今日は帰らないんだな」

「気まぐれだよ」

俯いたままの薫からは、表情を窺い知ることとはできない。話題をすっぱりと断ち切ってしまうので、コミュニケーションを取ろうとするだけで一苦労である。それで会話が途切れてしまい、少しの間だけ彼らに沈黙が戻った。

話題に困つたのか分からないが、真二は薫の近くまで歩み寄ると、手近な椅子を引っ張つてそこに腰を下ろした。新たな話題が切り出されたのは、それからだ。

「なあ、お前、夢つてあるの？」

それは唐突な言葉だった。真二の顔に、少しだけ後悔の念がよぎつた。切り出す話題を間違えたかな、とも言いたげな表情である。

「僕にはない」

「そっか」

「君にはあるの？」

これまで断定するようにしか言わなかった薫が、ふいに問いかけた。中性的な顔を持ち上げ、ちらりと真二を流し見る。自ら切り出した質問のはずなのに、真二は意表を突かれたように目を丸くして、気恥ずかしげに頭を掻く。

「ある。オレ、選手になりたいんだよね」

「選手」

まるで文字をなぞるように、薫がゆっくりと繰り返す。

「そう、サッカー選手。プロのね」

薫はまた顔を持ち上げて、ちらりと真二のことを確認する。怯えているというよりは、自分と対話している人物を再確認するような、そんな仕草だった。

「なれるよ」

返答を受けて、真二が照れた笑みを浮かべる。希望の世界にいる者しか浮かべることのできない表情、それが今の真二の笑みだった。あのような笑顔は、少なくとも今の薫に浮かべることなんてできない。

「ありがとな」

照れながら感謝の言葉を告げて、真二は立ち上がった。

「なあ、やっぱり今日は一緒に帰ろう。一人で帰るのは寂しいからさ、オレだってそうだもん。だからさ——」

そつと手が差し伸べられ、薫は意外そうに顔と手を見比べずにはいられなかった。戸惑う彼のことを見て、真二が苦笑を浮かべながら促してくる。

「ほら」

見上げる者、見下ろす者。薫がこれまでの学校生活でよく体験してきた構図だったばかりに、腕を持ち上げるのはそうとう躊躇われた。おそろおそろ持ち上げた手を、待ちきれないかのように向こうから掴まれる。がっちり握られた手が、上下にぶんぶん振られた。握手だ。

妙におかしくなつてしまい、薫が微笑む。

「なんだ、お前、笑えるじゃないか」

呆れたように言った真二だったが、それもすぐに笑みへと変わる。思えば、あの日を契機に二人は友達になっていた。

しかし、その時は気付かなかった。楽しい日々なんて、長くは続かないと。

あれから数カ月後、高校一年生の春休み——深見薫の友人、宮川真二は突然自殺する。

プロローグ（後書き）

というわけで、物語開幕です。よろしくお願いします。

更新は気分しだいなので幅がありそうですが、最後までプロットはできているので書ききることだけは約束します。気合だ、気合。はあ、今回も頑張らないと……。

一章：芹沢美奈（前書き）

視点者：芹沢美奈

一章：芹沢美奈

芹沢美奈は学校生活に希望を感じていた。

学校用の机が置かれている教室に、生徒たちの顔も陳列されている。二年生に進級したばかりなので、慣れない環境にみんな不安そうだ。クラス替えがされてからまだ三日しか経っていない。ぎくしゃくした空気はもう少し続きそうだった。

生徒たちの顔色を見回してから、美奈の視線は自らの机へと戻る。新しい友達を作ろうと思ったのだが、それにはもう少し時間が必要かもしれない。

「……お、美奈っち、髪型変えたんだ」

視線を戻した机に、ぐでつと体を寄りかからせている者がいた。髪型を中わけしておでこを覗かせるこの少女は、城崎千鶴だ。入学してすぐ友達になった者なのだが、学年が繰り上がる時に別々のクラスに飛ばされてしまった。まだクラスの雰囲気固まっていなかった今だから、たぶん不安になって美奈のところに来たのだろう。

美奈は後頭部で結んだ髪を意識して、それから声を出した。

「新しい学年になったわけだしね。ちょっと心機一転して、なんちゃって」

「うん、似合ってるよ、そのポニーテール。これまで下ろしてたのも全然良かったんだけどねえ。美奈っちはどんな髪型にしても似合うからなあ、羨ましいぞコラ」

「えへ、まあ褒めても何も出ないけど」

美奈はちよつとだけ照れくさそうな仕草を取ると、その澁刺そうな瞳で千鶴のことを見た。千鶴は未だにぐでつと机に身を預けている。なんともだらしない。

「あーあ、美奈っちと同じクラスになりたかったなあ……。寂しいっただけじゃない」

「どうせいつでも会えるんだから我慢しなさい」

「うつ、手厳しい」

普段ならもう少ししっかりしている千鶴が、今日は異常にだらけていた。もしかすると朝会前で眠いのかもしれない。いつもは美奈の方が間抜けなくらいなのに、今に限っては立場が逆転してしまっている。

「これから授業が始まるなんて、考えたふなひほ……」

「こら、ちゃんと日本語喋りなさい」

千鶴は日向にあるアイスのように溶けていきそうだ。ダルいなら教室に帰って机で寝てればいいものを、わざわざここまで出向くのは単純に絡みたいからだろう。美奈は目前のおでこを見て、人差し指と親指で輪を作った。軽くデコピン。無反応。やれやれ。

「ほら、そろそろ授業が始まるよ。ねえ、千鶴ってば」

「分かつてる、分かつてますよ課長……」

分かつていないにもほどがある。どうしようかと美奈が思案し始めた矢先、ふいに教室の一角から複数の哄笑が聞こえてきた。びっくりと視線を飛ばす美奈と同様、これまで机にへばりついていた千鶴もむくりと体を起き上がらせる。

「……何？」

訝しげな声が、美奈へとかけられる。

「分かんない」

しかし、そのまま美奈の視線は笑い声の起こった一角に注がれていた。どうも誰かを三人ほどの男女が取り囲んでいる。あまりいい感じはしなかった。何故かって、先ほどの笑い声はただの馬鹿騒ぎじゃなくて、誰かを虚仮にしているようだったから。

先ほどの笑い声で目が覚めたのか、千鶴が美奈にしか聞こえない声で呟いた。

「やな感じ」

「うん、嫌な感じだ」

まだ断定はできなかったけれど、とても不快だった。そんな美奈と千鶴のやり取りなど気にも留めず、目前では未だに何かが続いて

いる。

「ねえ、美奈。変なことはしないでよ」

「何よ、変なことって」

「関わったりはするなってこと。面倒なことになるから。あの取り囲んでる三人、悪評高いやつらだよ。それにあの席に座ってるの——薰くんだ。いじめられっ子の、深見薰」

取り囲む三人の合間から、わずかにだがその深見薰という少年の姿が見えた。いたってノーマルで、大人しそうな男の子だ。格好によつては女の子に見えるかもしれない。黒縁めがねとの組み合わせが印象的に映る。

「……ふうん」

とすれば、やっぱりいじめかな。そう考えると、急に胸の辺りがむかむかしてきた。

もともと美奈は正義感が強いのだ。困っている人や不正は見逃せないし、誰かが虐げられている姿は他人事でも心が痛くなった。今日だって煙草をポイ捨てした女を注意したし、登校中の電車で痴漢していた男もとっ捕まえだし、バスの中で立ちっぱなしだった老人には席を譲ったくらいである。うん、我ながら頑張ってる。

だからこそ、と言うべきか。美奈は目の前で行われている事実が許せなかった。

この教室にいる生徒たちは、みんな気まずそうに視線を逸らしている。知らないふりをしているのだ。そう、いじめつてのは、いつも——こんなものだ。

思わず席を立とうとした美奈だったが、それを見咎めた千鶴が両肩に体重をかけてくる。

「千鶴」

「駄目。学校生活、楽しくしようと思っただけなのは駄目なの。それが暗黙の了解、大人になるための、ね」

美奈はぶつくさ言いながらも、自らの席に座りなおした。確かに千鶴には迷惑をかけられない。いじめの標的が自分に向かうだけなら

いいけれど、千鶴は巻き込みたくない。

「……美奈っち、ごめんね」

千鶴は悲しげな微笑みをみせた。

「なんで、千鶴が謝るの？ ……そんな必要、ないよ」

いじめに遭うのが怖いのは分かる。本当は美奈だつて怖いから。

でも、汚かったり嫌なものを見なかったことにするのは間違ってる。

ましてや、それが大人になるための条件だというのなら——美奈は別に大人になんてなりたくはなかった。

+

一章：芹沢美奈（後書き）

暗い話を書きます、書きたいんですって言ってきたんですけど。
いざ書いてみると結構気が滅入ってきますね（汗）。

次回サブタイは『深見薫』

一章・深見薫（前書き）

視点者・深見薫

一章：深見薫

深見薫の学校生活に希望なんてものはなかった。

薫は席に座ったまま、辺りにいる生徒たちの確認した。当たり前障りのない会話を繰り広げている者たちもいるが、まだ一人で机に向かっていている生徒も珍しくはない。二年生に繰り上がって、まだ三日目である。仲良くなれなくても仕方がない。どうせ三年生も引き続きこの面子なのだから、ゆっくりと友達になればいいのだ。ゆっくりと。

それに、もともと薫は滑らかに舌が回るようなタチではない。自分から話しかければ、確かにそれなりの知り合いはできるだろうが――本音を言えば、向こうから話しかけてきて欲しいのだ。友達は欲しいけれど、自分から話しかけるのは怖い。

結局、何のアクションも起こさず、薫は自らの席に座っていた。そうやって沈黙している彼の姿は、本当に空気と同じだった。

「――な、やっぱり空気だろ、あいつ」

面白くない道化でも見ているように、失笑が聞こえてきたのはその時だった。薫は慣れっこだったので、あえてそれを無視した。ただし視線は机に落ちる。

「だははっ、相変わらずじゃん。あいつ、一人になっても健気に学校来てるぜ。まったく、さっさと辞めちまえて話だよな。マジでウザいから」

「同感」

三者三様で癪に障る声を上げて、薫の机を三人が取り囲む。一年の時に嫌がらせをしてきた者たちと顔ぶれは変わっていない。なんて暇なやつらだ、帰れよ。しかし、そんな台詞は気の弱い薫に言えるはずもなく、胸の内で萎んでいった。

教室で誰かが交わしていた、当たり障りない会話が消えた。まるで法廷で行われる裁判のように、薄っすらとした静寂が教室を包み

込んでいく。

「おい、挨拶もなしだよ、マジでウザいなお前」

辛辣さを伴った、攻撃的な声が響く。本音を言えば、確認したくはなかったが――正面の人物を見るため、薫は視線を持ち上げた。ビンゴ、予想通り。

正面にいる人物は、いつも生意気に媚びへつらってる飯田和光だ。赤茶色に染め上げた髪のおかげで一発で分かった。耳元にはピアスこそないが、穴が開いている。どうやら学校生活とその他で上手くオンオフは付けているらしい。ちなみにこうやって高圧的なのは弱者をいじめる時だけで、この三人の中では一番下っ端だ。弱者を攻撃しなければ自分のポジションを維持することできない、可哀相なやつ。

「まあまあ、挨拶くらいはいいじゃないか。生意気だけど」

その右脇から一見穏やかに毒を吐いたのは、優等生のような格好をした河村忠志だ。格好は先ほどの飯田とは対照的に、一見は普通の学生に見える。しかし、裏ではなかなかだ。校舎裏で煙草は吸っているし、酒を飲んだこともある。それだけならまだしも、薫の体に煙草を押し当ててきた時はさすがに殺意が芽生えた。時折、狐のように細められる瞳は、こちらの心を読まれているようで最高に不快だ。

「ほんとカオリンは生意気だね。蹴っ飛ばしたいくらい」

左脇から見下してくる視線の持ち主は、女を捨ててるとしか思えない態度の佐藤美紀だ。校則に逆らうように染められた茶髪はさすがだが、口だけで薫に直接手を出してこない卑怯者だ。この中では大人しい方で、いつも周りに合わせる感がある。一応、こいつは河村の彼女をしているらしい。鬱陶しい者同士でつるんできるといっわけだ。

「なあ、お前、友達できた？」

どうせ、いないんだろ？ 下卑た顔で問いかけてくる飯田の心の声が聞こえていた。

「いないに決まってるヨ。そんな顔してるもん」

「いやいやいや、いるかもしれないじゃん。みんな、可哀相だってほら、薫くんだって悔しそうな顔してる。要するにいるってことだろ？」

「でも何も言えないんじゃないや、関係ないよな。空気だぜ、空気」

「根暗」

「美紀、それは死語だって」

一斉に汚物をばらまくような哄笑。見るも耐えないといった感じで、クラスにいる生徒たちは視線を逸らし続けていた。ああ、やっぱり学年なんて関係ない。繰り上がったってすぐに日常が変わることだってない。一瞬でも期待した自分がバカだった。

無視し続けているのが気に食わなかったのか、飯田が怒気を孕ませて薫の髪を掴んだ。そのまま強引に顔を引き上げてくる。

「お前、何か言えよ」

その時、薫の頭に浮かんだ台詞はこれだけだった。

死ねよ、死んでしまえ――

ふいに教室の隅から、ガタリと椅子を押し出した音が聞こえた。取り囲んでいるこいつらは誰も気には留めなかったが、薫は隙間からその方向を少しだけ見た。ポニーテールの活発そうな少女だったぶん、クラスメイトだろう。だけど、立ち上がった途端にもう一人の少女が押さえ込み、立ち上がった彼女は不満げに席に座りなおした。

「おい、聞こえてるのかよ、カオリン」

その言葉に続くように、他の二人から失笑と嘲笑が浴びせかけられた。しかし、そんなくだらないものが、今の薫に届くはずもない。先ほどの少女の姿が、薫の脳裏には鮮烈に残っていたからだ。

一章：深見薫（後書き）

自分でも驚くぐらいの文章の濃さだったりして。

序盤ということもあり、結構濃いです。登場人物の解説が長いせいだ。もう少しすると落ち着いてくると思うんですが……。

次回サブタイは『予期せぬ出会い』

一章・予期せぬ出会い（前書き）

視点者・芹沢美奈

一章：予期せぬ出会い

授業が終わり、放課後になった。

美奈は授業道具をまとめると、すぐに学校を飛び出した。あれから一日中、あの薫という少年は三人組に絡まれていた。授業が終われば、絡まれ。休み時間に入れば、絡まれ。それにどうやらあの三人組は美奈と同じクラスメイトらしい。うわ、前途多難。

一日中、薫を助けるということが頭の中にちらついてはいたが、その度に千鶴の台詞も思い出していた。悶々していたのは一度だけではない。今日だけでこれほど疲れたというのに、こんな生活を毎日も味わいたくはない。

ああいう光景を見ると、知らず知らずのうちに頭が熱くなっってしまうのだ。今日は一日中熱くなりっぱなし。すぐ学校を飛び出たのは、風に当たりたかったのもある。

くそ、自分が同じ立場だったら、ケンカ売ってるところなんだけどなあ。

「もうっ」

美奈は虚空に向かってパンチを繰り出した。ポニーテールがゆらりと揺れて、元の位置まで戻ってくる。それから、気分を萎ませるように溜息。

駅と学校間はバスに乗って十分程度の距離なのだが、今日はその道のりを徒歩で制覇しようとしていた。ストレッチ解消には運動。美奈のその持論は昔から変わっていない。

途中、立ち寄ったコンビニのトイレを借りた。用を足すためじゃなくて、ちょっと顔が気になったからだ。鏡を覗き込んだ自分の顔は、なんとも言えない疲れに見舞われていた。自分で言うのはどうかと思うが、普段はもうちょっと可愛い。瞳には元気があってぱっちりしているし、笑顔を作ってくれば誰かが寄ってくると自負してたくらいだ。

(……ちよつと、ベタ褒めしすぎかな)

自意識過剰っぷりに少し辟易しながら、美奈は駅の方を目指すことにした。脚には心地よい疲労を感じる。これなら今日はご飯食べて、お風呂入ればぐっすりだ。

駅前のバス停を通りがかった時、ふいに自分の学校——和泉高等学校前から生徒たちを拾ってきたバスが到着した。バスのドアが開き、そこから同じ制服の生徒たちが降りてくる。その中に見慣れた人物を見つけた。

「あ、あの子……」

ぼそりと声に出したはずなのだが、聞こえていたらしい。黒縁めがねをかけた少年が、何気ない動作で美奈の方へと振り向いた。

「あ」

「や、やあ偶然。同じクラスだったよね？ えーと……」

まさか気付かれるとは思ってもしなかった。しどろもどろになりながらも話しかける展開に急修正。語尾を濁したのは、いまいちなんて呼べばいいか分からなかったからだ。

「薫……、深見薫」

「あ、薫くんか。ごめんね、名前覚えてなかったんだ」

などと言ってみたが、そんなことは絶対ない。むしろインパクトが強すぎてほかの生徒よりも人一倍覚えてるくらいだ。

「……君は？」

「芹沢美奈。薫くんとは結構席が離れてたけど」

「そっか」

とりあえず自己紹介は終えたが、それから会話がなくなってしまった。美奈は愛想笑いを貼り付けて対話してたが、急に訪れた沈黙に少し笑みが引きつりそうになった。よわった、話しかけた方がいいが話題がない。

何か話題がないかと必死になる美奈に対して、薫は少しだけ不審そうな顔をする。

「あ、そ、そうだ！ 薫くん、家はどこらへん？」

「船橋。ここが市川市だから——隣町だね」

「そ、そっか。ちなみにあたしは市川なんだ。船橋、大きい町でいいよね。あたしも良く買い物しに行ったりして」

だからどうした。自分自身で突っ込みたいほどなのだが、その時の美奈は焦りすぎててそんなことも気にしていなかった。これは、後で確実に自己嫌悪タイムになるな。

黒縁めがねの奥で、薫が一度だけ瞬きをして、言った。

「僕も市川は好きだよ、高校の方は閑静で落ち着いてるし」

「ちよっと静かすぎる気もするけどね」

「でも、僕にはそれくらいがちょうどいいよ。僕の住んでる辺り、うるさいもの」

あの三人組に絡まれてた時はほとんど喋らなかったのに、口を開くと意外と話してくれるものだ。美奈にあつた緊張が少しだけ緩む話すことになってよかった、とも思った。

今、美奈たちが立ち話している駅前を、様々な人々が通り過ぎていく。同じ制服を着た和泉高校の生徒は当然、近隣にある女子学院や、公立高校の生徒たちもいた。こうした者たちに、今ここで話している美奈たちのことはどう映っているだろうか。

影のある少年と、快活な少女？ いやまあ、それは美奈の想像でしかないけれど。

「ごめん、僕はそろそろ行くね。この後予定があるから」

「あ、うん……でも、ちよっと待って」

不思議そうな顔をして、薫がこちらの方を振り返る。まるで湖のように透き通った瞳が、焦っている美奈のことを映し出しているかのようにだった。ちよっとドキリとした。

「最後に。……あのさ、クラスのこと、どう思ってる？」

おそろおそろ問いを紡ぐと、薫の透き通っていた瞳が一瞬で翳った。答えを聞くまでもない。その反応が何よりも彼の感情を雄弁に語っていた。

「どうこうもないよ」

「……変なこと聞いて、ごめん」

薫は浮かべた暗い感情を振り払うかのように、ゆるゆると首を振った。

「いや、いいんだ」

そして、薫はそれだけを告げると、駅に逃げ込むように背を向けて去っていった。先ほどまで浮かべていた暗さは消えて、どこことなく虚しげだった。美奈は薫の背中を見送りながら、ただ口の中で「また明日」と呟くことしかできない。

はつきりと見える安息の明日があれば、誰も苦労なんてしないのに。

駅近くのマンション屋上から、漆黒の外套を着込んだ男が眼下を眺めていた。

彼が最も興味を惹いたのは、眼下で不慣れな会話を繰り広げている少年と少女の姿だった。同じ高校のものと思われる制服を着込んでいる少年と少女は、実に対照的だ。大人しく影のあるような印象の少年に対して、少女は実に活発的に見える。

屋上の風で黒外套をはためかせながら、彼は二人をじっと観察する。すでに人のものを超越したその視力は、もはや猛禽類のそれに近い。——彼は、化け物だった。

ゆっくり、ゆっくりと。

学術書でも眺めるかのように、彼はずっと二人のことを見つめ続けていた。

一章：予期せぬ出会い（後書き）

一章終わり。書いてる自分も想像以上の短さにびっくり。

主人公とヒロインがようやく出会えたので、話的にはこれからって感じです。

次回サブタイは『哀れな被害者（仮）』

二章：哀れな被害者（前書き）

視点者：飯田和光

二章：哀れな被害者

薄暗い部屋の中で、飯田和光は夢から覚めた。

ひとしきり荒い呼吸を繰り返して、肺の中にある空気を入れ替える。心臓はバクバクと早鐘を打っていた。ベッドから起き上がった体には汗が浮いていて、服がべっとりと張り付いている。最高に気持ちが悪かった。

先ほどの夢が現実でなかったことにほっとすると同時に、飯田は何とも言えない気分を引きずったまま、起床することになった。とても嫌な夢を見ていた。その夢の最後に、自分は何者かに――殺されたのだ。

「マジでウゼえ……」

飯田はぼんやりとした意識のまま、自室を眺めた。六畳ほどのフロアリングには、飯田の寝ていたベッド、小型のテレビ、ちょっとしたぶ台がある。それから衣服などをしまっている箆笥。その上に乗せていた目覚まし時計が、午前五時という時刻を告げていた。つまり、明け方だ。学校に行く準備をするにしても、ちょっと早すぎる。

気だるい感覚の体を無理やり立ち上がらせて、カーテンを一気に開く。明るい日差しが差し込んでくるが、目を細めるほどではなかった。二度寝を決め込もうかとも思ったが、先ほど妙にリアルな夢を見てしまったため、とても眠る気にはなれなかった。どうも覚醒してしまったらしい。

しばらくの間、飯田は窓から夜明けの空を眺めていた。そんな彼を現実に引き戻したのは、部屋のドアがノックされる音だ。何の予兆もなく、それは聞こえた。

「……おふくろ？ それとも、おやじ？」

ドアの向こうから返答はない。

落ち着き始めていた心臓がドクンと動いた。すごく胸騒ぎがする。

こんな時間に部屋のドアを叩くなんて家族としか思えないのに、飯田にはドアの向こうにいる人物が、他人のような気がしてならなかった。オレは今、誰かに狙われている？

呼吸するのと同然の殺気を感じた。獲物を狙う狩人の気配があった。ドアノブに力が加えられる。ゆっくりと開かれていくドアの向こうに、狂気に満ちた目をしたそいつがいた。

「ひっ……」

自分の喉からこんな声が出るのを、初めて知った。

「お前、まさか——」

もしかして、オレはまだ夢でも見ているのか？ 飯田はそう思ったが、何度瞬きを繰り返しても、目前にいるそいつの姿は消えなかった。

夢では——ない。

そいつは愛撫するかのように穏やかな瞳のまま、狂人のそれで嗤った。そこからしてちぐはぐで、違和感だらけで、壊れていた。

一步、また一步と距離を縮めてくるそいつを見て、恐怖に身が竦んで動けなくなる。そいつの手に握られている無骨なナイフは、まるでどこかの軍隊が使っているようなものだ。抜き身のナイフは明け方の日光を反射して、煌いている。

ようやく飯田が次の言葉を発することができたのは、そいつが目前まで迫ってきて、もはや逃げる余裕がなくなっただけのことだった。

「なんで、お前が、ここに」

掠れた喉から出るのは、もはや意味もなさない言葉だけ。

「……オレを殺すのか？ いやだ、やめてくれっ。オレは死にたくない。なんでオレなんだ、もっとほかが、そうほかがいただろう？ だって、あれは不可抗力で——」

引きつった喉からはもう声など出ないと思っていたが、命乞いはすらすらと出た。まだオレは喋れるのか。その事実、自分自身で驚いた。

しかし、もう次の瞬間には飯田の口を塞いでいた。もう聞きたくないと言っているかのようにだった。口元に触れたその肌の肌は冷え切っていて、全身に鳥肌が立った。

「やめ、」

くぐもった飯田の声は、そこで一旦途切れることとなる。その手の手にしていたナイフが左肩を貫いたのだ。刃物の煌きが体に埋められる。

「ぐ……があっ！」

無骨な刃が骨を貫く感触、神経ごと叩き切られるような感覚に、飯田は目玉が飛び出さんばかりに絶叫した。

この時、気絶することができたならどれだけ幸せだっただろう。痛みにもんどり打ちながらも、飯田は床に這いつくばった。必死で逃げ惑う。まだ無事な左腕を動員して、流れ出る脂汗を無視して、訴えかけてくる痛みを忘れて——恐怖に飲み込まれるままに。

「ひっ……ひいっ………」

過呼吸になりそうな体を引きずって、唯一ある部屋の出入り口まで体を動かす。背後から追いかけてくるその時は、動けないも同然の飯田にトドメを刺すつもりらしい。

否、それは間違っていた。そいつは愉快そうに口の端を持ち上げると、哀れに這いつくばっている飯田を仰向けに変えた。その手には、いつの間にか二本目のナイフが握られている。食いしばった歯の合間から悲鳴が漏れる。今度は右肩を刺されていた。

口の端からよだれを垂らして痛みに耐えていると、まるでマジックのようにまたその手にナイフが握られていた。びくりと目を見開いた瞬間、太股に一撃。こいつ、いたぶるつもりか。すぐに感付いたが、飯田にはどうすることもできない。

「……う、あ……ぐ………」

体中にナイフが杭のように刺さる。一本、また一本、飯田は杭打ちにされていく。殺しがよほど楽しいのか、そいつは興奮に酔いしれていた。一本、また一本。突き刺していくたび息づかいが荒くな

り、瞳にある嗜虐の炎が強さを増す。もう何本突き刺さっているかなど分からなかった。泣き笑いのような声が出た。

朦朧としてくる意識の中、飯田は窓から差し込む逆光の果てに、一匹の鴉が降り立ったのを見た。小首を傾げ、この部屋で行われている惨劇を目撃している。

まるで死神みたいだ――

そう思ったのと同じ時、飯田の頭蓋骨に最後のナイフが突き立った。

そいつにとつての、第一の殺人が終わった。

+

二章：哀れな被害者（後書き）

よしよし。書き終わったのでアップ。

グロさを強調しようと思ったけど、なんかまだまだなあ。

次回サブタイは『変わらぬ人間模様』

二章：変わらぬ人間模様（前書き）

視点者：芹沢美奈

すみません、フッタ部に追記書いてます。

二章：変わらぬ人間模様

「——美奈っち、恋はしてる？」

「何よ、突然ね」

その日、机から教科書を取り出ししていると、だらしなく寄りかかっ
てきた千鶴が言った。

「いやね、昨日の辺りでも結構情報が入ってきててさあ。やっぱり
クラス替えてでかいのかな、色んなところでカップルが続々誕生
してるんだよね。若いつていいねえ、わたしもそんな恋したいなあ。
過剰な期待はしてないけどさ」

新しい友達作りに難航していたかに見えた千鶴だったが、探せば
どこにでも気の合う相手はいるらしく、結局それは杞憂に終わった
らしい。新しく出来た友達をツテに、さっそく千鶴は情報源を広げ
たようだ。そう、この城崎千鶴という女は情報屋にして優秀だ。一
年の頃から、どこからか学校内の情報を拾ってきては、無意味に美
奈へとぺらぺら喋っていた。

そんなに口が軽いと、友達から信用なくしちゃうよ。その度にそ
う諭していた美奈だったが、どうやら本人は口に出していい情報と
悪い情報は区別しているらしい。毎度のように渋い顔をするのは、
今回も例外ではない。

「それだけでどさ……美奈っち、恋はしてる？」

美奈は少し呆れたような表情のまま、溜息混じりに返した。

「してない。あっても、千鶴には言わない」

「そんなあ。美奈っち、それは酷いよ。ちゃんと機密情報って言っ
てくれれば、誰にも言わないようにはしてるんだよ？ これでもさ」
「そう。意外に知られてない努力ね」

しかし、そんな言葉も今の千鶴には届かなかっただけ。まるで
夢でも見ているかのような顔をしていた。美奈は仕方なさそうに口
を開く。

「恋をしたいなら、そんな千鶴に一つだけ提案があるわ」

「おっ、美奈っちが提案するとは珍しいね。期待」

立派なおでこの下にある両目が、その瞬間だけ活力を取り戻して美奈を見る。なんて現金なやつだ、要するにこっちに絡みたいだけじゃない。

「……いつもより起きる時間を遅めにして、睡眠時間を長くしよう。千鶴は毎日ふとんの中で『あと五分……』とか言ってそうに見えるから、そのまま寝てればいいよ。そうね、目安はいつもの登校時間より遅めってところかな」

千鶴は馬鹿みたいにうんうんと頷いていた。そのまま続ける。

「それから飛び起きた千鶴は、きつと焦りながら部屋を飛び出すはず。たぶん、靴を履いたまま髪型を整えたりして、パンもくわえてるか。あ、そうそう、この方法は妙に目覚めがいいのも特徴だね、千鶴にはぴったりだよ。そして、遅刻しそうになった千鶴は、通学途中の曲がり角を飛び出したところで、運命の人と――」

「うわ、すっごいベタだね、それ。どこの少女マンガだ」

これまでじつと聞いていた千鶴が、何とも言えない苦笑を浮かべていた。

「オススメよ。あたしは実践しないけど」

「こっちだってしないよ！ それなら朝の根拠ない占い方が当たるし、曲がり角を飛び出した時に車に撥ねられる方がまだ勝率高いよ！」

なんの勝率だ。美奈は心の中で突っ込み返しながらも、自らのつまらないジョークにくすりと笑う。ひとしきり突っ込んだ千鶴は、先ほどよりどこか元気そうだ。

「……美奈っち、人を本気にさせるのが上手いなあ」

「いやいやそれほどでも。しかし、分かりやすい皮肉だね」

「分かりやすくしたんだよ、もう！」

くだらない話に華を咲かせた後、千鶴は唇を尖らせて机に顔を埋めた。どうやら、まだ机から離れる気はないらしい。よほどのお気

に入りなのか。

おでこを観察するのもいい加減飽きて、美奈の視線は教室の方へと向かった。昨日に比べれば、クラスメイトの一部は活発なコミユニケーションを行うようになってきている。環境に適用してきたのだろう。もうちょっとすれば、生徒たちの関係も決まるのかな。

そこまで考えて、ふと意識は深見薫へと向かった。彼はどう考えても、あまり友達がないタイプだと思う。このクラスで言えば、最下層の一人。そんな評価を下すのは美奈でさえ嫌だったが、実際ほかの生徒からしたらそうなのだろう。彼はこのクラスで地雷みたいなものだ。触れれば痛い目を見る。だから誰も触らない、見なかったことにする。

そして、もう一つ気になる存在と言えば、あの三人組だ。一番チンピラ臭いのが飯田、優等生ぶってるのが河村、その後ろに引っ付いている佐藤。名前はすぐに覚えた。ある意味、薫と対極の立場である彼らは、良くも悪くも目立つのだ。

その日、薫の机の辺りにいるのは河村と佐藤だけだった。理由は分からないけれど、とにかく飯田はその場にいない。一人減っただけなのに、美奈は少しほっとした。

「今日は飯田のやつ、いないんだ」

教室を見回している美奈に気付いたのか、千鶴は机からまったりと声を出した。うーん、だらけていると思ったら、意外に油断できないやつ。

「そうみたい。……ちょうどいいわ」

そう言っただけで立ち上がった美奈のを見て、千鶴も慌てたように立ち上がった。

今日もまた押さえ込むつもりだ！ 美奈はそう判断して、すぐにその手を振り払う。千鶴は大きく口を動かして、でも美奈にしか聞こえない声で囁き始めた。

「駄目、手を出したら痛い目みるって前も言ったでしょっ」

「だからって、放っておけるわけないよっ」

しきりに辺りを警戒する千鶴に、美奈はいつもより真剣な眼差しで小声に返す。そのまま出来るだけ穏やかな声で、こう続けた。

「千鶴。あたしは大丈夫だから。それに千鶴には被害かけないようにするからさ、自分の教室に帰ってて。あとはどうにかしてみせるよ」

「美奈！」

背中からかかる声は、もはや耳には届かない。美奈は迷うことなく一歩ずつ踏み出して、薫の方へと向かっていく。途中、見て見ぬふりをしている生徒たちの視線が突き刺さったが、美奈は気にしなかった。誰だつて怖いに決まってる。でも、自分の正義を曲げてまで、自分に嘘をつくのはもう嫌なんだ。

美奈は自分出来る限りの怖い顔を作って、河村の肩に手を置いた。

「ちよつとあなたたち」

声をかけると、何気ない顔で河村が振り返った。何が起こったのか分からないような顔をしていた。ずっと俯いていた薫も、その時ばかりは顔を上げる。

「ああ？ 誰だ、君は」

「芹沢美奈。あなたと同じクラスメイトよ」

クラスメイトからの視線が突き刺さりながらも、美奈は怖気づくことなく河村を睨み続けた。近くに立っていた佐藤が、美奈の足先から顔までを眺めて失笑する。人を小馬鹿にした仕草が、実に頭にきた。

「やめなさいよ、薫くんが嫌がつてるでしょ」

「ハッ、何言ってるんだ。えっと——芹沢さんだっけ。何も言わないやつ嫌かどうかなんて、なんで分かるの？ 何も言わないうってことは受け入れてるんだ。問題ないだろう」

「そうそう、カオリンはこういうことされると興奮するマゾなんだよ。知らなかったの？」

静まり返った教室に、ぷつ、と河村の押し殺した嗤いが響く。美

奈は強烈な怒りを覚えた。ここで怒るのは相手を喜ばすだけだと知っていても、それを抑えることはできない。

「あなたたち、少し黙りなさい」

「ふうん、ミナちゃんも命令するんだ。教師でもないくせに、同じ生徒に向かつて。クラス替えしたばかりなのに、そういう態度はほかの人たちに嫌われちゃうよ？」

ああ言えばこう言う。もともと薫をいじめることを止める気などないから、こういった適当な口を利くのだ。一応、分かってたつもりだったんだけどな。

「薫くん、同情するよ。こんなやつらに絡まれて」

しかし、薫が何かを言おうとする前に、目の前にいる河村が口を挟んだ。

「こんなやつら扱いとはね。常識を疑うな」

何が常識だ、言い訳がましいにも程がある。この揚げ足の取り方が、性格の悪さを如実に表していた。どこか余裕ぶって見返してくる狐目は、まるでこちらの心を見透かしているかのようなのだ。ああ、なんて嫌みっいたらしいやつ。

「うるさいわね、いいから必要以上に薫くん絡むのはやめなさいよ」

「だから、なんで君に言われる権利が――」

その時、ふいに教室の引き戸が動く音がした。弾かれるようにそっちを見たのは、美奈だけではなく、教室にいた生徒全員である。

もちろん、河村や佐藤もだ。

それから出席簿を持って教室に侵入してきたのは、二年三組の担任である伊藤孝一だった。叩き上げの中年教師は、眼鏡の中にある瞳を瞬かせ、これまで教室で何が起こっていたのかを看破したようだ。何も言わなかったけれど。

「……サイアク」

舌打ち混じりに吐き捨てた佐藤は、そのまま去っていった。近くにいた河村も同様だったが、こっちは氣勢を削がれたような顔をし

ていた。白熱しかけていた口論を中断されたのが、よほど気に食わなかったらしい。

「薫くん」

辺りに誰もいなくなってから、美奈はそつと彼の名前を呼んでみた。そんな深い仲というわけではなかったけれど、昨日話した仲だ。それくらいは許されると思った。

すると、薫は俯いていた顔を少しだけ持ち上げ、言った。

「……芹沢さん、ありがとう」

その声は消え入りそうだったけれど、れっきとした感謝の言葉だった。

言葉を交わした辺りで、教室にいる生徒たちが一斉に席へと戻り始めた。そろそろ朝会が始まる時間帯だ。その流れに乗っかって、美奈も着席することにした。そういえば、いつの間にか千鶴の姿が消えていたが、どこへ行ったのだろう。

教室が静まってくると、担任の伊藤孝一がゆっくりと口を開いた。
(どうせ、面白くない話だ)

これまで昔話や自分語りが多かった教師だし、話の面白さはあんまり期待していなかった。あっても自慢話だろうと美奈は高をくくっていた。しかし――

「君たちに重大な知らせをしなければならぬ」

え、重大な知らせ？ 近くにいたクラスメイトたちが顔を見合わせ始める。しかし、その場にいる誰も答えを持ち合わせていなかったようで、視線は教壇へと戻ってきた。もちろん、美奈にとっても予想外である。

「今日、クラスメイトの飯田和光くんが自宅で……亡くなった」

ずっしりと響く一言は、美奈だけでなく教室の空気をも凍らせた。はは、と美奈は乾いた笑いを浮かべたが、その場では誰も笑わなかった。河村や佐藤は目に見えて不機嫌な顔になったし、薫は俯いたままだったからだ。

とある生徒が言った。

「今日の冗談、オチは……ないんですか？」
ゆつくりと首が左右に振られる。その日に限って、オチはなかった。

二章：変わらぬ人間模様（後書き）

色々なものと戦いながら書き上げました。それでも状況としてはまだ甘いかな。

次回サブタイは『事件判明』↓『事件現場（仮）』

【追記】

ラストでワンシーン増えてしまったため、すでにお読みいただいた方は、もう一度ラストの辺りだけお読みくだされば光栄です。すいません……。それと、次回サブタイも変わりそうです。

二章：事件現場（前書き）

視点者：芹沢美奈

前回の文章、ラストだけワンシーン追加してます。見てない人はすみませんが、そちらにも目を通してくれるとありがたいです。

二章：事件現場

放課後になったら、家の前まで行ってみようと心に決めていた。授業終わりの鐘が鳴り、荷物をまとめて学校を飛び出す。まだ放課後になってすぐだったから、美奈のように真っ先に帰宅しようとする生徒は少数だった。途中、昇降口の辺りでいじめっ子三人組のうちの二人——河村と佐藤の姿を見かけた。二人とも無事に一日を終えたようだが、先日ほどの元気はなかった。まだ飯田の死を信じられないのか。

（……まあ、そうかもね）

仲良くしていた同級生が突然死んだとなったら、そりゃ美奈だって驚く。そういった意味では、美奈も彼らには同情していた。あの二人だって、立派な被害者だ。

朝会で飯田が亡くなったのを聞いたとき、美奈は確信していた。飯田は普遍的な死を向かえたわけではないと。交通事故なら担任は隠すことなく死因を告げただろう。しかし、担任はそれを隠した。それは、たぶん隠さなければならぬ死に方だったからだ。

他殺か。自殺か。それとも、いかがわしい事故か。

ともかく、飯田の住所はどうにか突き止めていた。情報源は千鶴だ。嫌っていた人間の情報まで保有しているとは、なんて情報量だ。さすがの美奈も少し背筋が寒くなる。

（……まったくあの子は。でも、こういう時は頼りになるのよね）
千鶴から聞いた住所だと——自宅は、市川真間。あの辺りは市川市でも北部に辺りベッドタウンで、比較的落ち着いた雰囲気がある。和泉高校からも近い地域だし、バスなどの移動手段は使わずとも徒歩で行けるほどの距離である。

少し歩くと、思いのほかすぐに住所の辺りまで辿り着いた。携帯電話に目を落として地図検索しながらだったから、迷うこともなかった。

飯田の家は一軒家だった。それなりに通行量のある道路側に面していたが、やはり土地自体は閑静なこともあって、人通りは激しくない。ただ家の前にはパトカーが止まっていた。その状況もあってか、家の近くには十名ほどの野次馬がいた。ちよつとした有名人みたいだな、と美奈は思ったが――いかんせん、同級生が死んだんだ。さすがに不謹慎か。

（しかし、やつぱり事件の臭いがするなあ……）

やはり現場まで赴いた意味はあるものだ。美奈はそんな感觸を懷きながら、ぼんやりと一軒家を眺める。家の門には黄色いテープが張られており、来客を拒んでいた。

何分か近くで様子を伺っていると、野次馬の会話が耳に入ってきた。

「この家の息子さん、どうも殺されたらしいですよ……」

視線を飛ばすと、五十代くらいのおばさんだった。近所の人だろうか。それが噂でしかないにしても、美奈の意識はついそっちに飛んでしまう。

「ってことは、事件？ あらまあ、物騒な話だわ」

「でも、この息子さん、ちよつと素行が悪いつて評判だものねえ……。何か危ないことに足を突っ込んだのかもしれないわ。なんせ、今の若者は何考えてるのか分からないし」

「ほんと、最近の若者は分からないわ」

どうもおばさん目線の会話に美奈は苦笑してしまう。単に話題性があるというだけで、内容は井戸端会議と変わらない。要するに、話題が欲しいだけだろう。刺激に飢えているのは、どの年代だって変わらない。求める刺激の方向性が変わってしまったただけ。

（何の情報も得られそうにないな……）

とりあえず住所は確認したけど、今日のところは無駄足かも。そう嘆息しかけていた美奈の元で、一旦は途切れたおばさんたちの会話が再燃し始める。どうも、近所の野次馬がもう一人増えたらしい。やれやれ、際限ないなあ。

おばさんたちは適当な挨拶を交わして、それから本題に移っていた。たぶん、今この話題はホットなんだろう。卑しさを感じつつも、美奈も聞き耳を立てた。

「聞いたわよつ、ここの息子さん殺されたらしいじゃない。……あ、これ、さっきスーパーで偶然会った、知り合いの刑事さんから聞いた話なんだけどね」

おおつ。まるで歓声でも上げるかのように、増えた野次馬に複数のおばさんが群がる。

「——で、どうも、近年稀に見るような残虐な殺人らしいみたいわよつ」

「残虐つて言うと、どんな感じが分かるかしら」

「なんでも、体に数十本のナイフが刺さったままだったつて。体中がぐちよぐちよになって、穴だらけで。犯行現場になった息子さんの部屋、血だらけで大変だつて聞いたわ。猟奇殺人事件……つてのかもしれないわね」

……おえつ。

にわかに信じがたい噂だったが、怖気の走る話でもあった。体中を数十本のナイフが刺さったままで、ぐちよぐちよで、穴だらけ。想像しただけで嫌になる。

実際、おばさんたちも想像したのか顔をしかめていた。

「……生々しいわね。これ、結構でかいニュースなんじゃない？」

確かにそうかもしれないな、と美奈は思った。やはり学校で担任が語るべきだった部分の多くは、故意的に隠されていた。生徒たちの不安を煽らないためだろうか。

とりあえず、現場に来て得られるべき情報は多々あった。やはり同級生は死んだという事実。パトカーが止まっているという事実。あとは真偽は不明だが、他殺であるという推測、猟奇殺人事件ではないかという噂——といったところか。

とりあえず、これ以上の情報は新聞かニュースで確認すればいい。手に入れるべき情報は、手に入れた。

まるで一仕事終えたような気分でその場から離れようとした美奈は、その時、野次馬の中に見慣れた制服を見つけた。あれは和泉高校の制服だ。ということは、やっぱり他の高校生も様子を伺いに来たのかもしれない。

ちらりと生徒の顔に視線を向けて、美奈は人知れず吐息した。うわ、知り合いじゃん。

「あれ、今日も会うなんて、とっても偶然だね」

美奈はゆっくりと近づきながら、空々しく話しかけてみた。向こうはこちらの姿を確認して、静かに口を開く。どうやら驚きはあったらしく、少しだけ目が見開かれていた。

「……なんだ、芹沢さんか」

そついう彼は、深見薫だった。

二章：事件現場（後書き）

なんかプロットで練った以上に、物語のボリュームが膨らまない。予想外の萎みっぷりなんです。なんでだ。

次回サブタイは『不思議な出会い（仮）』

二章・奇妙な出会い（前書き）

視点者・芹沢美奈 ↓ 深見薫

二章：奇妙な出会い

「薫くんも来てたんだ、ここ」

「まあ、ちよつと気になってたからね」

野次馬の中に紛れ込んでいた薫は、別段変わった様子もなく、そんな言葉を返してきた。どこか口数少ないのは変わらないが、それでも教室にいる時に比べればだいぶマシだ。

「やっぱり、薫くんも事件だと思った感じ？」

「うん。少なくとも交通事故じゃないとは思ってたよ」

さすがに朝会の事情説明では納得できなかったということか。美奈だってそうだったのだから、納得できない生徒がほかにいても不思議ではない。みんな、考えることは一緒である。なんだ変なことしてるのは自分だけじゃないな。少しだけほつとした。

「……どうも、飯田くん本当に亡くなったみたい。家の前にパトカーも止まってるしね。やっぱり、事件だったのかもね」

「そうだね。僕も最初は事故だと思ったけど。……どうやら、そうじゃなさそうだ」

薫は一軒家の方を眺めたまま、特に感慨もなさそうに答えていた。美奈は先ほど小耳に挟んだ噂話を、切り出してみることにした。

「証拠もない噂なんだけど、猟奇殺人事件かもしれないって」

「……猟奇殺人？」

なぞるように問いかけてきた薫に、美奈はうんと頷いてみせた。

「なんでも体中に数十本のナイフで串刺しにされたままだったんだって。穴だらけで、ぐちゃぐちゃで。どうもあたしは信じきれないんだけど、ここまで情報が隠蔽されてると、信じちゃいそうな話でもあるから不思議よね」

「噂でしかないけど、確かに流行りそうな話だ」

「うん。さっき、近所のおばさんらしき人たちが話してた」

そう薫に伝えてから、美奈派ちらりとおばさんたちの方へと視線

を飛ばしてみた。まったく気付いていない。なんて無用心だろう。こうやって噂も広がっていくのかもね。

「河村と佐藤、今日はどっちも元気なかったよね」

いつもならば、朝会が終わるやすぐに薫に絡んでいたはずだ。それなのに、今日だけはどちらもずっと席に座ったままだった。これまでを考えれば、信じられないような出来事である。友人が死んだという事実が、よほど衝撃的だったのかもしれない。

おかげで、それから薫は誰にも絡まれることなく一日を終えていた。薫からしたら、今日は楽園に近い一日だったのではなからうか。……あつても困るよ」

「そうだね、そう思う。でもさ、少しだけ同情もするんだ。友達が殺されてたら、あたしはたぶん冷静でいられる自信ないから……」

「それは、僕もだよ」

はあ、と薫は思い溜息を吐いて、一度だけ言葉を区切った。

「……でも、芹沢さんは優しいね。少なくとも、僕は彼らに同情なんかできないからさ。今回のことだって——『ざまあみる』、僕はその一言だけで片付けられる」

「そっか。そう、だよね……」

あの三人組にいじめられている薫からすれば、飯田の死などどうでもいいことなのかもしれない。死んでくれてせいせいしているのかもしれない。所詮、平和な学校生活を送っている美奈には理解できないのだ。ほぼ毎日いじめられる方のことなんて。

急に会話がなくなつて、美奈はすぐさま愛想笑いを貼り付ける。

場の空気を良くしようとしての対応だったが、肝心の薫はあまり気にしてなさそうだった。

「そういえば、単純に気になつたんだけどさ……」

「うん？」

先ほどまで暗い感情を覗かせていた薫が、邪気のない不思議そうな顔をする。

「薫くんは、何か部活やってたっけ」

「いいや、あいにく運動は苦手だし、集団行動も合わないから帰宅部。……芹沢さんは？」

「あたしも帰宅部。もともと一年の時はバトミントン部入ってたんだけどさ、あそこって結構本気で練習してるのよね。あたし、お遊びレベルだったから無理だなって思ったの」

「そういえば、あのままバトミントン部に残った千鶴はどうなったんだろうか。もともと美奈がバトミントンをしたくて入部したのに、誘った千鶴の方が長続きしているのは不思議なことだ。」

「ふうん、じゃあ芹沢さんは塾とか行って勉強してるのか」

「その言葉を聞いて、美奈の笑みが固まる。痛いところ突かれていた。」

「……行っていないんだよね、それが」

部活を辞めてから、母からの視線が妙に痛い。塾に行くのを進められて、それを断ったこともあるのだろう。顔を突き合わせる度、無言の圧迫を感じてしまう。

「え、じゃあ何してるの？」

「うーん……とりあえず、遊んでる。テレビ見たり、漫画読んだり、パソコンしたり」

すると、これまでほとんど表情を変えなかった薫の瞳に、呆れの色が浮かんでいた。それを読み取った美奈はなぜか少し悔しくなった。

「そっという薫くんは？」

「僕も遊んではいるけど、読書はしてる。あ、もちろん漫画じゃないよ。一応文章の勉強してるって言えば、読書は大義名分が出来るからね。すごく便利」

「結局サボってるんじゃない」

美奈はがっくりしつつも返答する。自らの趣味を語った薫が、つまらないやり取りに軽く微笑む。それがあまりにも珍しかったため、不覚にも美奈は見惚れてしまう。

（なんだ、薫くん笑うと可愛いじゃない……）

いつも無口で無愛想なのに、ふっと笑うとまるで無邪気な子供のようだった。

「あの、芹沢さん……？」

不審そうに呼びかけてきた薫の声で、ようやく美奈は我に帰った。
「あ、ああ、いや、その……ちょっと考え事しててさ！」

美奈は焦りながら弁論したものの、それは照れ隠しにしかならない。言葉に反して、顔はどんどん高潮してくる。穴があつたら入りたい気分だった。

「ね、ねえ、薫くん。そんなに読書が好きなら、成績はいいのよね？」

「……そこがイコールにならないのが辛いところだけだね」

「あらまあ」

美奈は苦笑したが、それと同時に親近感も募らせていた。もっと無愛想な子だと思っていた。薫はクラスでは省かれるような立場だが、一生徒としての感情は共有しているらしい。妙に嬉しくなった美奈は、ようやく思いついてきた話題を振った。

「あたしでも読めそうな本、あるかな？」

「芹沢さんの好きそうな本？」

うん。明るく頷くと、薫が顎に手を置いて思案し始めた。

「芹沢さんが好きなジャンルって、恋愛モノとか？」

「うーん、そういうのより冒険モノとか好きよ。意外かもしれないけど」

自分は本当に女の子っぽくないなあ。美奈は自身のことを総評したが、別にそれ以上の感情はなかった。男の子っぽくてもいいよね、そういう女の子って逆に同性からモテたりして。

内心でくすりとした美奈は、ふと薫の背後にある五階建てほどのマンションを見た。

「冒険モノか。それならなんとか。そうだね、冒険モノなら——」

薫はいつもより顔を綻ばせながら話していたが、その時の美奈は

それを確認することができなかった。じつと見つめた五階建てのマンション屋上、その鉄柵を越えた位置に黒い外套の男が立っていたからだ。

美奈のいる距離からは、男の詳しい外見を判断することはできなかった。ただ、その服装は注目してくれと言わんばかりの自己主張ぶりだ。晴れている空をバックにしているため、余計にそう感じられたのだろう。まさに黒点のようだった。

（まさか、あの人……！）

動揺する美奈に、黒外套が視線を投げた。目が合った。

目が合うと、男はその瞳をにやりと不敵に歪ませ、唇を動かして何事かを呟いた。距離があるから聞こえはしない。しかし、美奈は分かっていた。この男、飛び降りるつもりだ！

背中に氷塊を投げ込まれたかの如く、美奈は身震いを感じた。

「……芹沢さん？」

美奈の不審な行動を見てか、薫が心配そうに覗き込んでくる。その時、一瞬だけ美奈の緊張がほぐれた。そうだ、まだ薫は何も知らない。だから、せめて凄惨な光景を目にするのは——自分だけいい。

そんな美奈の気持ちも露知らず、ビルの屋上から、男が飛び降りた。

美奈は思わず目をつむっていた。五階建てのマンションまで、距離にして百メートルもない。ゆっくりと目を見開く。男が飛び降りたのは、美奈たちから死角となっている曲がり角の辺りである。そして、おそらくまだ誰も発見してはいない。

「薫くん、ここにいてっ」

「芹沢さんっ、どうしたんだよ突然っ!？」

「いいから。……ちよつとそこまで。すぐ、帰ってくるから」

会話は一旦途切れ、美奈は薫の当惑すらも無視して一心不乱に走り出した。絶望的な考えが脳裏を掠めたものの、それを必死で振り払う。まだ生きているかもしれないじゃない。助けることができる

かもしれないじゃない。だから、自分はその可能性に賭けるよ。

先ほど男が飛び降りた、角の方へと曲がる。もうすでに心の準備はできているはずだったが、角へと踏み込み一步は多大な労力を要した。ゆっくりとまぶたをこじ開ける。

「……………」

美奈は首を捻った。

飛び降りたはずの男が、いない。

何かがおかしかった。確かに飛び降りた男を見たはずだ。なのに、痕跡すら見当たらなかった。まるで、最初からそこに存在していなかったかのように。

目の前で一匹の鴉が飛び立った。それは美奈の頭上を飛び越えて、やがて空の彼方に消えていった。人通りも少ない路地に取り残され、美奈はただ立ち尽くすことしかできない。

ふと、耳元で声がした。

『虚ろう者に気をつけるんだな』

美奈の背中がぞわりと粟立つ。まるで深淵から響いてくるような声だった。穏やかで落ち着いていて、だがそれ故に底の見えない気配。

反射的に辺りを振り返った先に、薫がいた。

「……………」

「芹沢さん……………」

薫は荒い息を吐いて、突然走り去った美奈のことを追いかけてきたようだった。辺りに視線を彷徨わせて、それから美奈のことを真っ直ぐ見つめてくる。

まさか飛び降り自殺を目撃したなどと切り出すわけにもいかず、美奈は言葉を詰まらせた。大体、自殺者の姿すら見つからないのに、弁明できるわけがない。必死で脳を回転させ、美奈は苦しい言い訳を導き出した。

「ちよつと走りたくて。あは、あはは……………」

誤魔化すように笑ってみたが、薫は訝しげに美奈のことを見返す

だけだった。

それにしても、さっき聞こえてきた声はなんだ。気のせいだろうか、でも確かに美奈はこの耳で聞いたのだ。虚ろう者。虚ろう者って何だ？

美奈は心の中で、その単語を何度も反芻していた。

美奈が家に帰ると、すでに母が夕食の準備を始めていた。

いつものように玄関で靴を脱ぎ、リビングの方へと足を運ぶ。なんかいい匂いがした。今日は美奈の好物が食卓に並ぶような、そんな気がする。

「今日はちよつと遅かったわね」

リビングのソファにかばんを投げ出すと、キッチンの奥からなんとなく含みのある声がかけられた。美奈の母、佳美が圧迫感のある視線を向けてきて、美奈は内心で渋面を浮かべる。先日、塾の提案を断ったのをまだ根に持っているのだ。

美奈は内心で渋面を浮かべたが、それをおくびに出すこともなく気付かないふりを通した。さっさと自室に引っ込んでしまおう。心中で懸命な判断を下した。

それからしばらくの間、美奈は自室にこもって漫画を読んだり、テレビを見たりした。最近はずっとこうなのだ。部活をしていたころよりも打算的で、怠惰な生活を楽しむようになってしまった。高校生活の指標を見失っているのだ。とは言っても、時間の浪費も思いのほか楽しい。実際、こういう穏やかな時間の流れは心地よかった。

やがて、リビングから夕食を告げる声が聞こえてくる。

「美奈、ごはんよ」

「今行く」

美奈は適当な返事をして、女の子の部屋にしてはやけにこざつぱりしている自室を後にする。リビングに着くと、すでに母と弟は食卓にいた。父は最近仕事が忙しいのか、帰りが遅い。

食卓に並んでいる肉じゃがを目にして、美奈は少しだけ心を躍らせた。今日はちょっとだけ気分がよくなった。

いただきます、と三人が一齐に言葉を交わす。

美奈が肉じゃがの器を持ち上げたころ、弟の和真がテレビのリモコンを操作し始めた。年下のくせに妙に大人びている和真は、バラエティ番組を有無も言わずにニュース番組へと変える。くそ、バラエティ番組がよかったのに。

「聞いたよ、姉ちゃん。これ、姉ちゃんのクラスのやつなんだろう？」
美奈が大きいシャガイモを口に放り込んだ時、ふいに弟が尋ねてきた。あつつ。シャガイモに四苦八苦しながらも、美奈はテレビの方を見た。

そこに衝撃の話題があった。

全国放送のニュース番組に、飯田和光という名前が踊っていたのだ。そのニュースでは、飯田が市川市内の高校に通っていたこと、猟奇的な殺され方したこと、死因などが事細かに解説されていた。体に数十本の凶器が付きたてられ、死因は出血多量。あの噂話は真実であった。事件現場でおばさんたちが交わしていた噂が、脳裏でしっかりと再現された。

それから、遺族たちが悲しみの会見をする場面に切り替わる。

完全に食えることを忘れて、美奈はじっとテレビの方に視線を飛ばし続けていた。

「――まさか、本当だったなんて」

「え？」

母と弟が同時に上げた問いかけを、美奈は首を振って誤魔化した。
「うっん、なんでもないよ」

その日の夕食は、いつもより静かなまま終わった。

+

なんで死んでしまったんだろう。

何度繰り返したか分からない思考を、薫はまた繰り返した。

事件現場を後にして帰宅することにした薫だったが、どうもそのまま家に帰る気にはなれなかった。その理由は、未だに朝会での一幕が頭の片隅に残っていたからだ。

なんで死んでしまったんだろう、まだ何も見返してすらいらないのに。

正直、薫は生徒たちから「いじめられっ子」という評価を受けているのが気に入らなかった。そりゃ客観的に見ればいじめられっ子かもしれないが、薫にもプライドくらいある。いじめられっ子という言葉は、まるで自分が弱者だと決め付けられているようだ。事実、弱者なのかもしれないが、そこを認めてしまったらおしまいだと思う。せめて気持ちだけでも気高くなければ、薫は負けの烙印を押されたままになってしまう。

だから、薫はいつか飯田含め、河村たちを見返してやろうと決めていたのだ。それなのに、飯田はあっさりと死んでしまった。なんてことだ。

(……ざまあみろ)

そう思う気持ちも、あることはある。さんざん好き勝手言っていた罰が当たったのだ。それ相応の報いというやつだ。ざまあみろ。ただ、引つかかる部分もあるのだ。最近、薫は奇妙な体験を味わっていた。今回の飯田の事件だって、そうである。あの事件現場を訪れた時、飯田の死に様を、薫はどこかで知っていた。それが確信となったのは、芹沢美奈の話を聞いてからだ。

「証拠もない噂なんだけど、猟奇殺人事件かもしれないって」

ああ、やつぱり——と、その時の薫は思った。飯田は体に数十本のナイフを突き立てられたまま、最期は頭蓋骨をかち割られたのだ。既視感である。見たこともないはずなのに、どこかで知っていた。体験していた。

おかしいな。自分はおかしくなってしまったんだろうか。

薫は公園のベンチで、妙に晴れない気分のまま、そんなことを考

え続けた。

二章：奇妙な出会い（後書き）

吹っ切れた！　ってわけじゃないけど書き出しました。

結局、自分の書きたいものを書くしかないんだね。たとえ受け入れられなくても、そうじゃなきゃ書く意味ないもんね。
今ここに俺は自分勝手にやるぜ宣言します（何）。

次回サブタイはまだ未定。

一部の場面差し替え、追加を行いました。

三章・化け物たちの対話（前書き）

視点者・特になし

三章：化け物たちの対話

翌日、飯田の家から霊柩車が発った。遺族たちは猟奇殺人事件が衝撃的だったこともあり、身内のみの密葬を行った。もしかすると、突然の死だったので一般者たちに対応する余裕もなかったのかもしれない。とりあえず、飯田の死は内密に行われた。

飯田の家から程近く。先日は美奈が自殺者を発見し、駆け寄った五階建てマンションの屋上に、今日もまた黒外套を着た男がいた。

「貴様とは一度、話をしてみたいと思っていた」

男の言葉は、低く何者かに投げかけられていた。今日はそのビルに、すでに彼以外にも先客がいたからだ。身なりは人間のようなだったが、なんとも言えない狂気を身にまとうていた。

「お前はダレだ」

先客は言葉を発した。掠れた声をしていた。

「貴様と同類だよ。昨日はやってくれたな」

「自分のヨクボウに従ったまで」

「ほう、これで一つ聞くことが減ったな。なぜ殺したのか、は俺が貴様に聞こうとしていた一つの話題だったのに。まったく、心底残念だよ」

すでに気温も上がって黒外套など見ているだけで暑苦しいというのに、男はまったく暑そうな素振りすらしない。彼は化け物だから、体温調節など必要としないのだ。

「しかし、ありがちな話だ。それ故に退屈でもある。欲望に従ってまで、と貴様は言ったな。しよせん、貴様もそこらに転がっている石ころなどとは変わらなかったということか。そんな理由で生まれた存在は、この世界に幾万といた。そして、みんな壊れていった。そこまでして化け物に生まれ変わる必要性あったのかね。俺には疑問だよ」

「お前はチガウと言うのか？」

「ああ、貴様と俺は違う。同類だが、何もかもが違うんだ」

男は自らの同類を蔑むように、そう言い放った。

「詳しいことをオシエは——貰えない、か」

「そうだ、教える価値などない、貴様にはな。そんな面白みもない理由で化け物になるやつは、勝手に壊れていくがいいさ。どうせ、貴様もあと数日の命なんだ」

「言ってくれ」

「大体、貴様にだって自分が余命幾ばくもないことぐらい、理解しているだろう？」

「まあ、な。長くはモタナイことは分かる」

「貴様は不完全だからな」

それだけ言うと、男は毒々しい嗤笑を貼り付けて続けた。

「だが、不完全ながらも貴様には期待していたんだ。ここに出向いてやったのも、貴様を特別扱いしているからだ。普通の輩には姿も見せないからな。命尽きるまで、好きに殺し尽くすがいいさ。生まれ変わったんだ、貴様にもそれぐらいの権利はやろう」

「なんだ、お前もカンヨウじゃないか」

「化け物同士、こういうところは仲良くしようぜ。だがな——」

そこで男は一度だけ、言葉を区切った。

「次に会う時は、当然ながら敵同士だ」

「問題ない。だが、オマエはちゃんと言うべきものがある。ナマエを聞かせてくれよ」

すると、男はふつと笑った。薄ら寒くなるような微笑で。

「——覚えておけ、不完全な化け物。俺の名前は——コルウス、コルウスだよ」

三章：化け物たちの対話（後書き）

もつね、後書きでは長くを語れない。自分が不甲斐なさすぎて（笑）。

でも地味に書いてくつもりです、これも。

次回サブタイは『その日の教室』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7220k/>

不条理な世界を虚ろうモノ

2010年10月21日21時18分発行